春風秋雨相

江利川毅 県立大理事長

青雲の志

徳修め理想に生きる

明けましておめでとうございます。皆さまにとりまして今年がよい年となりますよう心からお祈りいたします。

成人式を迎えられた皆さん、おめでとうございます。私にとっては半世紀も前のことですが、あの頃の燃えるような青雲の志は今でも私の宝です。

■「四知」の心構え

内閣府事務次官の時に青雲の志に触れた文章を書いたことがある。国家公務員倫理審査委員会の花尻尚会長から要請され、倫理週間用パンフレットに以下の文章を投稿した（2005年）。

国家公務員の皆さんは、志を抱いてこの職業を選び、誇りと責任を持って仕事をしていると思います。それなのに、時に事件を起こす人がいて、公務員倫理が問題になることは、極めて残念であります。われわれは国家と国民に関わる重い仕事に携わっているのですから、より高いしっかりした心構えを持たなければなりません。

「十八史略」に出てくる楊震（後漢の人）の話。賄賂を贈ろうとした人が言う「暮夜知る者なし」。楊震は言う「天知る、地知る、子（あなた）知る、我知る。なんぞ知るなしと謂（い）うや」。相手は愧（は）じて退く。「四知」。私はこの心構えを鑑とするよう努めています。

「命」は、文字を書いた竹簡をきちんと揃（そろ）えること。「倫」はきちんとした人間関係。きちんとした人間関係を保つには、正しい行動、誰に知られても恥ずかしくない行動を取ることです。難しいことではありません。公務員になったときの初心を覚えていますか。あの純真な青雲の志に照らして自身を律する、それで良いのです。

■新成人の君たちへ

「青雲の志」。辞書には「立身出世して高い地位に上ろうとする大いなる志のこと」と出てくる。「俗世間を超越しようとする高潔な志」と書いてあるものもある。しかし、いずれの説明も私の意図や気持ちにぴったりとしない。そのため、その後、この言葉は使わないようにしてきた。

ところが、17年1月号の「致知」（月刊誌）に「徳を修めて聖賢の地位に至ろうとする志」「理想に生きること、これこそが青雲の志ではないか」との説明が載っていた。わが意を得たりである。今年成人式を迎えた皆さんに、この意味における「青雲の志」という言葉をお贈りしたい。

私が20歳の時は大学3年で、東大の安田講堂に機動隊が入り、入学試験が中止になったときである。騒然とした空気はあったが、高度経済成長が続いていて、一方で、公害問題が大きな社会問題になりつつあった。そういう中で、自分の進路を考えていた。

私は、経済成長も大事だけれど、人々の生活がその犠牲になってはならず、企業は公害対策を講じた上で製品を造っていくべきだと思っていた。そういう観点から公害問題の解決に取り組みたいと思い、当時公害対策を担当していた厚生省（現厚生労働省）に就職することとした（当時は環境庁はなかった）。

■人生を深く考える

さらにさかのぼって県立熊谷高校2年生のときのことである。東京オリンピック後の不況で級友の家が倒産し、彼は大学進学を諦めざるを得なかった。当時、私は天文学者になろうと思って、理系科目重視の勉強をしていた。しかし、この事件を契機に、自分の好きなことより社会のために役に立つ仕事をすべきではないかと考えるようになり、志望を文系に変えて大学を受験した。人々の生活を良くしたい、不幸な人を少しでも少なくしたい、社会正義を実現したい、それが私の青雲の志である。

その志を曲げることなく、国家公務員の道を選び、厚生省、環境庁、総理官邸、内閣府、厚生労働省、人事院で仕事をし、現在は埼玉県立大学で役割を果たしている。来し方を振り返ると、若いころ胸に焼き付けた志が、私の生き方を引っ張ってきたように思う。

成人になられた皆さん、二度とない若い時期に自分の人生のこれからを深く考えてほしい。そして、それぞれが青雲の志を抱いて、自らの人生を切り開き、充実した人生を築いていっていただきたい。

（次回は2月12日付）